

島本和彦の

バスケットボールは こんなにおもしろい！

島本 和彦

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：島本さんは、その道では有名なバスケットボール界のオーソリティーでいらっしゃいます。娘のハイスクール時代の友人のお父さんということでお目にかかったのが縁ですね。『月刊バスケットボール』の創刊から四半世紀にわたって編集に携わってこられたそうですが、もともとジャーナリストとしてスタートされたのですか？

島本：そうですね。大学1年のときから玉川大学の出版部でアルバイトをしていましたから。バスケットの道に入ったのは会社に入って雑誌を作ることになってからです。スポーツは好きで学生時代はずっとバレーボールをやっていました。玉川学園という、音楽や美術が盛んで、スポーツはどうしてもついでというような学園でしたから、バレー部がなかったの、高校、大学と部を作ってスポーツを楽しんでいました。

佐多：島本さんはいつもチャレンジをしてこられたので、今日はバスケットボールをきっかけに生命力がわき出るような話を聞かせていただければと思います。島本さんというどうしてもNBA*のほうに話がいってしましますが、近年世界中を熱狂させているバスケットも、十数年前まではアメリカでもさほど人気のあるスポーツではなかったそうですね。

島本：そうですね。バスケットはそこらまで黒人の割合の多い、ドラッグが蔓延しているといわれる、イメージのあまりよくないゲームだったんです。それがマジック・ジョンソンとラリー・バードというスターの登場で一変してしまいました。彼らをはじめとするマルチ・プレーヤーたちが、複雑なフォーメーションを驚くべきスピードでこなして人々を魅了したので、人気が一気に高まりました。

佐多：世界中でバスケットに興味のなかった人たちにまでアメリカのバスケットのすごさを見せつけたのが、パルセロナ・オリンピックのドリームチームでしたね。マジック・ジョンソンのHIV感染も衝撃的でしたし。

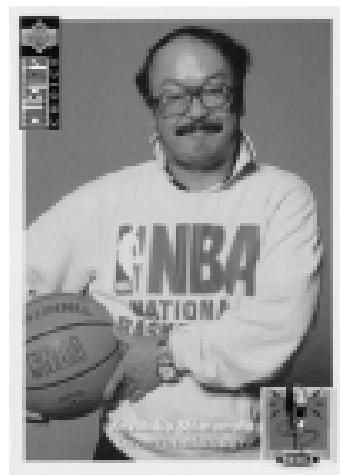
島本：NBAのチームは契約時に選手に保険をかけますが、ジョンソンのHIVは保険加入時の身

体検査で見つかったんです。保菌者ですが発症はしていません。現在、中国系のドクターが主治医で、米国でも最高のケアを受けているはず。彼は今「マジック・ジョンソン・ファンデーション」を設立して活発に活動しています。これは地域のHIV/AIDS教育・防止プログラムとしてスタートしましたが、現在はもっと幅広く、アメリカの若者たちのための教育・健康・社会プログラムを助成したり癌撲滅運動を行ったりしています。

佐多：先シーズンで引退しましたが、マイケル・ジョーダンとはまた優等生そのものの選手で、アメリカン・ヒーローの一人ですね。

島本：アメリカ人に言わせると、マジック・ジョンソンは隣のお兄さんみたいな感じで、マイケル・ジョーダンはヒーローなんですね。ジョーダンは他の選手がロッカールームで裸でインタビューを受けたりするなかで、絶対にシャワーを浴びてスーツに着替えてから受けるんです。要するに話すこともプロの仕事だからと。決して感情的な言葉を使わないし、皆がこうあってほしいというような理想的な言葉をはいてくれる。人間、せつば詰まったところでどんな態度をとるかで、人間の格がわかると言われますが、ファンはそれを彼のプレーに見るわけですよ。追い込まれて残り何秒しかないというときに、もってこいといって、相手が皆ディフェンスに来るのにそれを破って決めて勝つ。有名な社会派コラムニストのボブ・グリーンは「彼は冬の寒いときに、全米の子供や大人に暖かい夢を見せてくれた」と語っています。スポーツの技だけではなく、観客を魅了する点においてマイケル・ジョーダンほど優れたスポーツ選手は今後現れないだろうと言われています。

アメリカでは高校のチームを作るとき、トライアウトという入部試験があるんです。ジョーダンが試験を受けたとき同じ学年に2mの子がいて、彼は170cm台だったので落とされました。それでも負けたことのない自分が負けたということまで辛い1年を過ごしたんですが、現在アメリカ中で「あのマイケルでさえ落ちて、それからあれほどまでに変わったのだから、君が今落ちても頑張るんだよ」という励ましの逸話と



島本 和彦 / しもと・かずひこ
1946年東京生まれ。1973年『月刊バスケットボール』（日本文化出版）の創刊に取り組み、1975年より同誌の編集長を務める。以後一貫してバスケットボールに関係し、アジア大会、ユニバーシアード、世界選手権、オリンピック、また、NBAのあらゆるシーンを取材。1985年よりNHK、CSのスポーツ/ESPNでTV解説も務める。現在は日本文化出版（株）取締役。またバスケットボール・ファンクラブ「HOOP HYSTERIA」の代表でもある。（HOOP HYSTERIAホームページ <http://www.bea.hi-ho.ne.jp/s1-rb/hoophysteria/>）

して使われています。ジョーダンは挫折やハンデを必ずプラスに変えていく、どんな小さなことでもモチベーションとして頑張れる方向にもっていきける人なんですね。

やっぱり人間、自分でもやりたいと思いがらも弱さがあるってできないことを、平気でやってしまう人がいるということで、夢を見ることが出来ますよね。世の中には体の強い人もいれば弱い人もいますが、決められた運命の中で最大限にあらがなければしょうがないんじゃないかとジョーダンを見ていて思いますね。

佐多：島本さんの著書『NBA雑学バイブル』で拝見しましたが、アメリカの小学生4,000人に誰と一番ランチと一緒に食べたいかというアンケートをとったら、2位のクリントン大統領とマイケル・ジャクソンを抑えてマイケル・ジョーダンが堂々の1位だったそうですね。

島本：それだけバスケットが社会に占める割合が大きいということでしょう。例えば日本では、男の子とお父さんが必ずといっていいほどキャッチボールをしますね。あれがアメリカではバスケットなんです。自宅のガレージにフープ（バスケットリング）があって、お父さんと一対一でやっているところが映画などでもよく見られますね。また、ドリブリングという言葉は、翻訳の世界では「竹馬の友」のような意味があるそうです。それだけバスケットが生活の中に入り込んでいるんですね。

佐多：島本さんはその著書の中で、その国のバスケットボールへの理解度、普及度がボールの売り行きで計れると書いておられます。1992～3年頃のデータだそうですが、アメリカは1年間に920万個で27人に1つ、日本が125万個で100



人に1つくらいの割合になるそうですね。

島本：この、視聴率ならぬ販売率でいくと日本は世界第6位とよく健闘していますね。ですがアメリカはなんといってもダントツで、僕がよく遊びに行く家はボールが7つも8つもゴロゴロ転がっています。バスケットは激しくやればいくらでも激しくなるスポーツですが、やろうと思えばいくらでもゆったりできるスポーツです。アメリカでは40歳代、50歳代、60歳代などと、年齢でリーグが分かれています。60歳代になるともうお腹が出てただボールを回しているだけという感じ。でもシュートはよく入る。そんな風にしていくつになってもスポーツで体を動かすことを楽しんでいます。

佐多：アメリカは国民全体が心からスポーツを楽しんでいる感じですね。そういう環境も整っている。スポーツを本当に熱心に育てようとしていますね。

島本：例えば子供たちにバスケットを教えようとしませんか。アメリカではサマーキャンプなどには親たちが1日いくらかと払うわけですね。日本はバスケットにしてもバレー、サッカーにしても団体スポーツはタダで教えてもらえるものと思っています。私たちが今やっているキャンプでは1日一人5,000円とって、50～60人集まってやっています。タダということは責任がないんです。我々は、やるからには楽しくしてあげなくちゃいけない。絶対怒らないでうまいうまいって誉めながらやっている。いいところを見つけてあげると、本当におもしろいほど成長するんですね。

佐多：ハーフコートで3人ずつでプレイするのは3オン3というんですね。アメリカでは、町の中のコートで若者たちがプレイしているのをよく目にしますが、日本にも根づいてきたと聞いています。

島本：アメリカには3つの大きな大会があって、最も参加者の多い大学生の大会では20万人が集まります。NBAの選手もすべて、この3オン3でバスケットの楽しさを知るんですね。

日本では10年くらい前にやってみようということになり、最初は集まるかどうかかわからなかったで、『月刊バスケットボール』で小さな広告をうち、24チーム募集しました。シューズ・メーカーの担当者など“さくら”も用意していたのですが、かろうじて30チームの応募があった。雑誌の中で大特集を組んでその楽しさを報告し、半年後に第2回を開いたら180チームも応募がありました。現在は、シューズ・メーカーがスポンサーになったりして裾野が広がってきましたし、96年からは、簡単に少ないスペースでできるという点に注目して、4人制サッカーのフットサルとともに通産省が、「3オン3とフットサルによる商店街活性化委員会」というプロジェクトをスタートさせています。僕の知人は「島本さん、いいこと始めてくれたね」って、平均年齢40歳のチームを作りました。「ゴルフも4人、麻雀も4人でしょ。バスケットやったらまた4人で動ける」って楽しそうです。昔スポーツやっていて今もやりたい気持ちはあるのに、という中年の方は多いですね。日本でももっと多くの人が気軽にスポーツを楽しめる環境づくりができるといいですね。

佐多：MLB（大リーグ野球）の野茂、伊良部選手のように日本人選手がNBAに行ってプレーする日はくるんでしょうか。

島本：部分的技術は通用する選手もいるかもしれませんが、まずは大学バスケットへの挑戦からでしょうね。先日、日本のプロ野球が60年の歴史を刻んだと言っていましたが、最初の頃食えるか食えないかわからずプロに飛び込む人がいたわけですね。それから30年たって、村上雅則さん、マッシー・村上さんがアメリカにチャレンジしましたね。それから30年後に野茂です。バスケットは日本ではまだプロもありませんから、これから20～30年かかるかなと思いますね。

佐多：島本さんご自身は今も取締役として、現場から離れてコンサルタント的に雑誌にかかわっておられるそうですが、今後どんなことにチャレンジされるのでしょうか？

島本：ゴルフのボビー・ジョーンズとか野球のジ

ョー・ディマジオなどアメリカの偉大なスポーツ選手の系譜のようなものがあります。強くてやさしくて清潔白であるという、理想のアメリカ人でもあるわけですね。ジョーダンを含めてそういったことをテーマにした本を書きたいと思っています。あとは、今のバスケット・キャンプを続けていきたいですね。バスケットはチームのスポーツですが、それを個人で習いに来られるようなキャンプを日本に根づかせたいですね。

佐多：あまりバスケットに縁のない人々へのバスケットの楽しみ方をひとつ。

島本：アメリカに行ったら、是非NBAのゲームをごらんになってください。ゲームがある日なら、ホテルでチケットが手に入るか聞いてみれば調べて取ってくれます。コートサイドは200ドルはするしプレミアもつきますが、上のほうの席なら10ドルくらいからあります。スポーツ、あるいはバスケットはエンターテインメントだと実感できると思います。

それとムービー。『HOOP DREAMS』という映画があるんですが、シカゴ郊外の貧困地域に育ったNBAプレイヤーを夢見る実在の14歳の少年2人を、4年間追いつけて撮った傑作ドキュメンタリーです。少年たちの4年間のバスケット人生に、人種問題、階級の問題、家族、愛情、競争、孤独など様々な問題を盛り込んで見応えがあります。あとは、ジーン・ハックマン主演の、邦題は『勝利への旅立ち』という映画があって、アメリカのバスケットボールのことがとてもよくわかります。どちらもビデオで見られるので興味のある方は是非見ていただきたいですね。

また、今年の秋には日本で5回目のNBA公式試合が行われます。11月6、7日に東京ドームで強豪中の強豪の2チーム、サンアントニオ・スパーズとミネソタ・ティンバーウルブズがゲームをします。妥協のない真剣な試合が見られることは確実なので、是非見ていただきたいと思います。アメリカの4大スポーツの公式戦が日本で定期的に行われているのはNBAだけなので。チケットは1,000円からあるので、映画を見るより安くアメリカのエンターテインメントを感じられると思いますよ。

* National Basketball Association